
バカと居眠りとAクラス

nature

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

【Nコード】

N7700Y

【作者名】

n a t u r e

【あらすじ】

学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」。

その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄二らと繰り広げる学園ラブコメデー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも…。

初投稿なので変かもしれませんがよろしくです！
作者は受験生なので更新は不定期です。
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。
嫌だ！って人はお戻り下さい。。

ぶろろーぐ（前書き）

はじめまして。 natureです。

初投稿になります。 どうぞよろしくお願いします。

ぶろろーぐ。

春。 ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわぁゝ……。眠いなぁ……。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「……先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言う。

「……おはようっす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとする。

「実は、先生はお前を１年間見てきて「こいつは吉井と並ぶＦクラス候補なんじゃないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかったかな。」

やっと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかったな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもうやめろよ」「無理っす。」「…即答か。」

「じゃ、残り頑張ってください。」

そう言って魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる……。

ぶろろーぐ。(後書き)

記入してありますが、更新は不定期です。

ご了承下さい。

主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175 cm

体重 62 kg

見た目 顔は中性的。ってかどっちかという女子。

だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によって機嫌が悪くなっていく。

眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。

友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。

また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。

やっていいことと悪いことの区別をしっかりとつけている。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれたぐらい）

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打つてもダメージは低いが、
面、小手、胴、突きの位置（頭、両手、腹、喉）を的確に
打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。
つまり、2回の確に打つたら相手は補習行き。

腕輪 もう決めてありますが、秘密です。

A対Fが終わった辺りで更新するつもりです。

その他 中学まで剣道をやっていた。同じく中学で剣道を

やっていた（という設定）の須川と知り合い。

何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを氣が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄二は中学校で出会った。

雄二と初めて会ったときに…？

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思ってい
ないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で

料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもっているが、頻繁に更新
されるので、

正確な記録はわからない。

第1話 設備で重視すること。

「そういえば、あいつはこのクラスになったかな…」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おつ、ここか…でかいな。」

入ったAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃っていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコンetc…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走って駆け寄ってきた。

「ん？お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走ってきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」だった。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張って勉強しましたから…。」

「へえ、そいつは殊勝なこったな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないようでそう答えると、

「はい…。そういえば、この教室って大きいですね…。」

少ししよげている美穂は教室を見渡しつつ、こう言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだな」とか言いそうだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

そ か れ ら 少 し 経 つ て

「皆さん、席について下さい。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？時間か。」

そうは言っても席に座って話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かった美穂と話していた。

「そうみたいです…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人から願います。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁人くん。次ですよ。」

「…ん？そうか。ありがとな。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言う。

「いえ…／＼／。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないか…。」

前の人が終わわり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わったし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメート達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

第1話 設備で重視すること。（後書き）

いきなりコメントがきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございました！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下さった皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしています。

では、読んでいただき、ありがとうございました！

第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと1話1話の文字数が少ないかな？ってこの頃思っています。

第2話 代表さん達と顔合わせ！

「…ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経って、魁人は起きた。

「……ちよつといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席ってあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかった。」

「ま、日頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だったからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかったらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よろしく。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言うと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻っていった。

「へえ、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思ってたよ。」

「僕も、次席はもらったと思ってたけどね。まだ、甘かったみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこようと思ったんだけど…。」

「今は自習したいらしいね。」

「真面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかった、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆真面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけど。ただ、結構有名だよ？緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言うとしょろ顔をしめて答える。

そして、魁人は結構有名だという。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知っているらしく魁人に言う。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかって、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちよつとそれで騒いだけど…。」

「俺は自己紹介が終わったあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと言う。

「まあ、今次席になってるってことは十分な実力があるってことだね。」

「そうだろうね。まずは緑野君を目標にやらせてもらっよ。」

「はは、まあ頑張ってくれ。じゃあ、俺はちよつと廊下に出てくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出てくるという。

「ああ、行ってきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知った顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おい、明久、雄二！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄二」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどのクラスになったんだ？」

「てつきり僕らと一緒にと思ってたけど。」

雄二が何クラスになったか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になった。立派なもんだろう？」

「へえ。…ってAで次席?! うそお?!」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がりばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のころからおかしいと思ってたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄二は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ、お前にはお見通しだったってわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻っていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ？…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思ったが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言っつて魁人は新校舎、そして教室へと戻っていった。

第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（前書き）

明日期末テストです。

え？勉強？ 何ソレおいしいん（殴

第3話 自習って寝るための時間でしょ？

「はあ？自習？初日からか？」

「そうみたいです。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしかけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言ったらしく、驚いた様子で言う。

「雄二…いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとな…。」

（あいつのことだからな…。A前のちょっとした仕掛けってどこか…。）

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄二の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁人くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かったら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したらどうですか？」

「ん…。課題は出てるか？」

「出てます。プリント3枚だけですけど…。これを今日中にやれ
って。」

美穂に言われたため、課題だけはやろうと思ったのか、課題はあるか聞く。

「教科は？」

「全部数学です。」

「数学か…。ちゃっちゃと終わらして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはり寝る気らしく、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?! もう終わったんですか?!」

始めて3分程でもう終わったらしく、寝る体制に入る。

「あれ？緑野くん？寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わってます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気でしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だったしな…。」

「だって言っても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ1枚目がやっと終わるところだった。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りにおちていた。

「でも、緑野くんって寝顔かわいいよね♪こうしてると女の子みたい♪」

「え？！／／…そ、そうですね…／／／」

愛子が魁人の寝顔を見てそう言うと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか?!」

「いゝや、なんでもないよ」じゃあボクは戻るねえ」

愛子はおもしろいものを見つけた、というふうに笑うと、自分の席に戻っていった。

「もう…。さて、私も課題を終わらせないと…」

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気になるらしく、なかなか進まなかった…。

「…ん、ふわぁあ、もうこんな時間か…。」

魁人が起きるともう下校時刻らしく、何人が帰る生徒が出てきていた。もうプリントも回収されたらしい。

「あ、起きましたか？」

「ん、美穂か。お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、よかったら、なんですけど…。」

「ん？どうした？」

美穂は何か頼み？があるらしく、魁人に言う。

「…一緒に帰りませんか？」

美穂は顔を赤くしつつ、そう魁人に言う。

「ん、別にいいぞ。保育園からの付き合いなんだから、そんな遠慮することないだろ。」

ただ、魁人は友達感覚で言っていると思うているらしく、そう答える。

「そうですよね…。はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っていると思うたらしう、ため息をつく。

「ちよつと緑野くん。そういう態度は感心しないなあ。」

「ん？工藤さんか。どういうことだ？」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういうって…。魁人くん、美穂ちゃんが幼馴染だからっていうただそれだけの理由で誘ったと思ってるの？」

「ああ。他にどんな理由がある？」

「はあ…。これは思った以上に強敵だね…。頑張ってね…。」

「はい…。わかってましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言う。と教室を出て行った。

「？ なんなんだ？…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい！」

魁人は意味がわからない、というように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもって、すぐ後を追いかけていった。

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（後書き）

タグで主×優子とか書いという全然優子が出せない…。

つ、次は出せると思います！

次も読んで下さると嬉しいです！

それでは！ お読み頂き、ありがとうございました！

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。

「しかし、今日の魁人くんの課題の早さには驚きました…。」

「まあな。1年の頃を知ってるやつなら皆そう言うだろう。」

只今、下校中。

「でも、美穂は俺のことよく知ってるんだから、そんなに驚くことでもないだろ。」

「あそこまで早いとは思いませんよ…。試験で数学何点だったんですか？」

「忘れた。腕輪は余裕でとれてたけどな。」

「…400点が余裕って時点でおかしいと思うんですけど…」

「そうか？…ん？」

魁人は何か見つけたようで歩くのをやめる。

「どうかしましたか？」

「…悪いけど先に帰っててもらえるか？」

「え？」

「明日に繰り越して…。」

「まあ…。いいですけど…。それじゃ、また明日。」

「ああ、悪いな。」

魁人は美穂を先に帰すと、改めて「何か」の方を見る。

「…やっぱ、人助けはしとくべきだよな。」

魁人は走って「何か」…。助けるべきと判断した所へ向かう。

「なあ、ちょっとだけだつて。一緒に楽しいことしようぜ?」

「嫌だつて言ってるでしょ!!」

「ちつ、しょうがねえ、力づくでいくか…。」

「え? ちょ、ちょっと…。」

チンピラ風の男達3人がある女子1人を囲み、迫っていく…。

「…ったく。そんなことしてて恥ずかしくねえのか?」

「ああ？…ぐあつ！！」

「おい、どうした…ぐつ？！」

チンピラの1人が手を伸ばしたとき、不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。

更に次の瞬間には、もう1人、地に倒れていた。

…そこには黒の木刀を持った男子が立っていた。

「な、なんだお前は？！」

「ああ？てめえらごときに名乗る名前なんざねえな。俺に勝てたら教えてやるぜ？」

「てめえ、なめやがつて！！」

「…屑が。」

そう呟いた瞬間、最後のチンピラは倒れていた。

「…怪我はないか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう。」

「それはよかった。」

ガヤガヤ…

「おい、あの黒刀、もしかして…。」

「ああ、あの強さ…。」

「あの悪鬼羅刹と互角にやりあったって…。」

この戦い（リンチ？）を見ていた人々は男子の正体に心当たりがあるらしく、口々に呟いている。

「おっと、目立ちすぎたな…。じゃあな！」

そういつて男子は笑顔を残し去っていった。

それを見た助けられた女子は

「…かっこいい／＼／」

と顔を赤くしていた。

「つたく、また目立つちまったな…。」

「よう魁人。また噂されるようになったな。」

「…茶化すなよ、雄二。」

「まったく、困った人を放っておけないってのは不便だなあ？」

「…まったくだよ。お前との一件のせいで、もう目立ちたくない
って思ってたんだがな…。」

翌日。

「おはよう。」

魁人は教室に入る。

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

「やあ、緑野くん。」

美穂、愛子、久保があいさつをかえす。

「緑野くん、今日も眠そうだね。」

「いくら寝ても眠気がとれなくなてな…。」

他愛もない話をしていると、魁人の後ろからもう1人入ってきた。

「あ、優子。おはよう。」

「愛子、おはよう……ああ！？あなたは?!」

「ん？」

入ってきた女子は魁人を指差すと急に大声をあげた。

「ああ、お前は昨日の…。」

「え？何、魁人くん、優子と知り合いだったの？」

「ああ、昨日、ちょっとな。」

入ってきた女子は昨日魁人が助けた女子…「木下 優子」だった。

「あ、あの。昨日はありがとう。」

「大したことはしてないさ。あの後、大丈夫だったか？」

「ええ。心配してくれてありがとう。」

「昨日…？昨日、私と別れた後ですか？」

「ああ、そうだ。木下さんがチンピラにからまれてたんでな。助けた。」

「だから私を先に帰したんですね。」

「ああ、危ない目にあわせたくなかったからな。」

優子は昨日のことでお礼を言い、魁人は昨日あったことを説明した。

「でも、何か意外だな。緑野くんが人助けというか…。そういうことに首をつっこむのは。」

「困ってる人は放っておけない性分だな。女子なら尚更だろ。」

久保が少し意外だと言うと、魁人は困っている人は放っておけない性分だと言う。

「でも、なんかっこいいよね、そういうの。優子も惚れちゃったんじゃない？」

愛子がふざけて言う。しかし優子は

「な、何言ってるのよ？！／／／そんな訳ないでしょ？！／／／」

と、明らかに焦ってしまっている。

「…冗談だったんだけどなあ…。へえ、まさか優子がねえ…。」

愛子は簡単に見抜いたが、魁人は

「本当だよ。俺が女子にもてる訳ないだろう？」

と的外れなことを言っている。

「しかも木下さんみたいなかawaii人が俺に惚れる訳ないだろうが。」

「なっ?! / / / / /」

優子は顔を文字どおり真っ赤にする。

「…鈍感で、しかも天然かい？」

「ホント、罪だよねえ…。」

魁人の発言に久保と愛子は苦笑いしている。

「…まさか、優子さんが…。」

その中で、美穂は1人で何か呟いていた…。

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。(後書き)

紫苑さん、コメントありがとうございます！

やっと優子出せました…。

…優子ってこんなキャラだっけ？w

正直、今回の話は自分であまり納得がいつてません。

優子の話の件の流れが無理矢理すぎるかな？ちょっとおかしいと思
っています。

まあ、自分の文才がないのを恨むしかないんですが…。

そついうことなんでいつかちょっと手直しするかもしれません。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂きありがとうございます！

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。

「あれ？今日はちゃんと授業受けるんですね？」

魁人が授業の用意をしているのを見て、美穂は聞く。

「ああ、たまには、な。それに…。」

「？」

「…多分授業は午前中だけだろうからな。」

「え？それ、どういうことですか？」

「午後になれば分かるさ。」

魁人はおそらく授業は午前中だけだと言い、美穂は首をかしげる。

「これで午前中の授業は終わりです。」

「ふう〜…やっと終わったか。」

「そうですね。それで、さっきのことってどういことですか？」

「ん？いや、多分そろそろFクラスがBクラスに宣戦布告にいつてるだろうからな。」

「そんなこと、なんで分かるんですか？」

魁人が午後の授業がなくなる理由を話すと、美穂は不思議そうにする。

「なあに、ちょっと考えれば分かるさ。さて、飯でも食うか…。」

そう言つと、魁人は弁当を広げ始める。

「緑野くん、それって手作り？」

「緑野くんが料理できるなんて、意外だな。」

そうすると、愛子と久保が弁当をもって魁人の席まで来た。

「あ、ご一緒してもいいかな？」

「別に、かまわない。美穂もいいだろ？」

「はい。是非。」

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「あ、待って、私も！」

優子も弁当をもってこちらまで来る。

「それで話を戻すけど、緑野くんって料理できるんだね。」

「ああ、一応な。」

「あまりそういうイメージではないけどね。少しもらってもいいかい？」

「別にいいぞ。好きなの取れ。」

「あ、私もいい？」

「ボクも！」

そういつて皆が魁人の弁当をとろうとする。

「あのー、久保くんはともかく、女子はやめた方が…。」

「え、なんで？」

美穂の忠告に愛子は聞き返す。

「…女子としてのプライドが欠片もなくなりますから…。」

「え？それってどういう…。」

皆が魁人の弁当を食べると、動きが止まる。

「ん？不味かったか？」

「いや、違うと思います…。」

「…驚いたな。凄く美味しい。」

「…そうだね。さすがのボクでも、男子にこれほどの料理をつくられると…。優子なんて再起不能になってるし…。」

「…美味すぎる…こんなの、勝てるわけ、ないじゃない…。」

久保と愛子は驚愕の表情をし、優子はなにやらぶつぶつ呟いている。

「そうか？俺的にはこういう弁当より、スイーツ系の方が自信があるんだがな…。」

「え？スイーツ？」

「1回食べましたけど、意識が飛ぶほどおいしかったです…。」

愛子は「スイーツ」という単語に興味を示す。

「デザートで一応、シュークリームなら作ってあるが食うか？」

「…普通学校のデザートでシュークリームを持ってくるかい？」

久保は普通ありえないデザートに苦笑いする。

「シュークリーム?!ボク、大好物なんだ!ちょうだい!」

「ん？…ほら。」

魁人は何か思いついたようで笑うと、シュークリームを愛子に差し出す。

ちなみに優子は美味しすぎる弁当をまた食べたため、今度はどこかヘトリップしている。

「ありがとう！…。」

愛子はシュークリームを取ろうと手をのばす。

だが、届かない。

なぜなら。

「…なんでどんどん手を遠ざけていくのさ。」

「ん？なんのことだ？」

ちよつとした意地悪である。

「ほね。」

「……。」

愛子が手をのばすが、その度に魁人がよけるため、愛子はシュークリームを手にいれられない。

「むっ……。早くちょうだい！」

「なら、早くとればいいじゃないか。」

底意地の悪い顔をして魁人は言う。

「魁人くん、そろそろ意地悪はやめてあげたらどうですか？」

「ん、そうだな。ほら、やるよ。」

美穂に注意され、魁人は愛子にシュークリームを渡す。

「ありがとうー！……はむっ。」

愛子はやっと手に入れたシュークリームにかぶりつく。

「おいしい……幸せ……。」

そして愛子もトリップしてしまった。

「……あゝあ、2人とも再起不能になっちまった。そこまで美味いか？」

「……とても美味しいと思うが。」

「慣れちまったから……。自分じゃわかんねえ。」

こうして、昼食は2人の犠牲者を出して終わった。

この頃、屋上では別の意味で再起不能者が出ていたが…。

…関係ないっす。

「今日の午後は自習になります。」

高橋先生が教室に入りそう告げると、すぐに教室を出て行った。

「本当に自習になりましたね…。」

「な？言っただろ…。」

魁人の予想は的中し、美穂は感心する。

ちなみにトリップ者2名はつい先程現世に帰ってこられました。

「一応課題ぐらいはやつとくか…。げ、英語かよ…。」

今日の課題は英語プリント2枚である。

「ん？緑野くんって英語苦手だったの？」

すると優子が魁人に声をかける。

ちなみに、意外と魁人と優子の席は近かったらしく、魁人の席の左前だった。

「…教えてあげよっか？」

「そうだな、そうしてもらえると助かる。」

優子の申し出を魁人は迷うことなく受ける。

「で？何が分かんないの？」

「…文の作りがまったく分からない。単語や連語、表現技法なら分かるんだがな…。」

「…それで次席をとれるってどういうことよ。」

魁人の英語の点数は150点前後である。

「この程度できてれば普通はOKだろ。Aクラスだからそう感じるだけで。」

「まあ、そうなのかもしれないわね…。いい？まずここはこの疑問詞から初めて…この文法でこれを表して…。」

「ああ、なるほど…。で、ここでこの使い方か。」

「そう。なんだ、やればできるんじゃない。」

魁人も基礎はしっかりしているらしく、少し教わるとすぐに出来るようになった。

「いや、木下さんの教え方がいいからだよ。ありがとう。」

魁人は笑顔でそう答えると、次々と問題を解いていった。

プリントの問題はほぼ同じ部分の復習だったので、1度理解するとすらすら進められるようになっていた。

「い、いや…。じゃ、じゃあ私は席に戻るわね…。」

「ああ、ありがとな。」

そう言つと優子は席に戻つていった。

（2人でああしているだけでこんなにドキドキするなんてね…。
どうやら、本格的に惚れちゃったみたい…。って、アタシ、何考えてんの?!）

自分で考えてて恥ずかしくなつたらしく、優子は顔を赤くし、自分のプリントを進めていった。

「……………」

美穂はそれを複雑な面持ちで見ていた…。

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。（後書き）

なんか、恋愛が上手くかけないっ！

誰かアドバイスを…（泣

次回も読んで下さると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

(前書き

…なんかどんどんタイトルが長くなってw

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

「ふああゝゝ……。やっと学校終わりか……。」

魁人は大欠伸をしながら言う。

「あら？珍しいわね。ずっと起きてたんだ。今日1回も寝てないんじゃない？」

「そうだな。午後寝ようと思ってたから、午前は寝てないし……。」

「午後は何やってたの？」

「木下さんに教わったことの復習。忘れないうちに復習しようと思って。」

「緑野くんにあそこまで出来ない教科があるのは意外だったわね……。あれで次席とれるんだったら英語でもうちよつと点とれるようになれば主席でも狙えるんじゃない？」

「それは勘弁だな。試召戦争では前に出たいしな。」

「まあ、男子は皆そう言うわよね。」

魁人は優子と談笑している。

「……………」

美穂はその様子を黙って見ている。

「…いいの？このままじゃ優子に先行かれちゃうよ？」

「良くはないですけど…。でも…。」

「じゃあ、ほら！」

「えっ？…きゃっ？！」

愛子は美穂を魁人達のほうへ押し飛ばす。

「ん？美穂か。…ああ、そういえば今日も一緒に帰るんだったか。」

「え？あ、はい！そうですね…。」

魁人は昨日の約束を思い出したらしく、帰る支度をする。

「よつと…。じゃあ木下さん、また明日な。」

「ええ、また明日。」

「じゃ、行くか。」

「はい。木下さん、さようなら。」

そういつて、魁人達は教室から出た。

「ちょっと悪いけど校門のところで待っててくれるか？」

「別に構いませんが…。忘れ物ですか？」

「いや、ちょっとFクラスに用があつてな…。悪いけどちょっと待つてくれ。」

「分かりました。校門でまっています。」

「悪いな。」

そういつて、魁人と美穂は一旦別れた。

「ここが、Fクラス。…ん？」

魁人が扉を開ける前に扉が開いた。

「ん、魁人か。ちょうど良かった、ちょっと聞いてほしいことがあるんだが…。」

そこには、雄二、明久、康太、姫路がいた。

「どうした？」

「今、俺達がBクラスと戦争してるのは知ってるだろう。」

「ああ、それで？」

「実は、今Cクラスが不穏な動きを見せていてな。不可侵条約を結びたいんだが……。」

「……………」

雄二の話を聞くと、魁人は考えこんだ。

「……お前ら、Bクラスと何か条約をむすんだか？」

「よくわかったな。今適用されているのは明日の再開戦までの一切の試召戦争に関わることの禁止だけだな。」

「……それだ。」

魁人が口を開くと、雄二は答え、魁人は笑う。

「おそらく、Cクラスで条約を結びたい、と言ったら、Bクラスがでてきて条約違反だと言う気だろう。」

「なるほどな……。だが、BクラスとCクラスには何かつながりがあるのか？」

「あまり知られていないが……。BとCの代表は付き合っている。」

「

「…そうか。だからこっちに有利な条約を結んだわけか…」

魁人は自分の推理を話すと、雄二は理解する。

「え？どういうこと？」

だが明久^{バカ}には理解できない。

「なんかバカにされた気がするよ?!」

「しょうがないだろ。バカなんだから。」

「…お前はバカ。さっきのは俺でも分かった。」

雄二と康太に駄目押しを食らい、バカ（明久）は「ちょっと?!」
…こっちに入ってくるなよ。

「それで、どうするんですか？」

「そうだな…。条約を結びにきた、と見せかけてあいつらをはめてやるか。」

「なら、俺は邪魔だな。待たせてるやつがいるから、俺は帰るぜ。」

「彼女か？」

「んなわけなえだろ。じゃあな、上手くやれよ。」

「ああ。ありがとな。」

姫路の問いに雄二は答え、なら俺は帰ると、魁人はその場を離れた。

「けっこう待たせちまったか？」

「悪い。待たせたな。」

「いえ…。じゃあ、帰りましょう。」

「ああ。」

そうして2人は帰っていった…。

（今日は緑野くんとけっこう話せたな…。）

一足先に帰っていた優子はもう家についていた。

今日のことをふりかえっているようだ。

そして、1つの不安なこと。

（緑野くんも、秀吉のことを知ったら、あいつに流れていつちゃうのかな…。皆みたい…。）

男であるはずの弟、「木下 秀吉」にしか皆、目がないこと。

（嫌…！そんなのは…。緑野くんなら、そんなことは…。でも…。

）

優子はその不安を振り払えずにいた。

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

（後書き

なんか、美穂があまり目立たなくなってきた…。

うーん、ヒロイン2人って難しいな…。

次回も読んで頂けると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？

登校中…

「ん？…あれは…。」

誰か見つけたようです。

「なんだ、雄二か…。」

「…自分からこつち来て、それがよ…。」

「しかし、今日は早くないか？」

このまま学校に行くとH R 30分前になります。

「ああ、やることがあるんでな。」

「ふ〜ん…。で、昨日はどうなった？」

「鎌かけたら簡単に言ってくれたよ。卑怯者もひっかかって出てきて、一網打尽だ。」

昨日あれから見事に策を打ち破り、逆に相手に痛手を与えてやったらしい。

「あいつはとり逃したが、他のBのやつ5人ちよつと、補習に送ってやった。」

停戦中だったが、先生らの審議の結果、そのB連中は今回の戦争には出れないらしい。

「成る程な…。で、Cはどうするんだ？」

「それを今からなんとかする。ちよつと用意があるから、先に行くな。」

「ああ、じゃあな。頑張れよ。」

雄二を見送り、魁人は1人で登校した。

「はよ〜。」

教室に入り、一応挨拶する。

「おはようございます。」

「おはよー、緑野くん。」

「おはよう。」

美穂、愛子、久保が返す。

「あ、おはよう、緑野くん。」

優子も遅れて返す。

「今日は俺より早かったんだな。」

「昨日がいつもより遅かっただけ。いつもこのぐらいよ。」

昨日自分より遅く来ていたため、いつも自分より遅く来ていると思った魁人が聞くが、優子は昨日が特別遅かっただけだと言う。

「昨日でFクラスとBクラスの決着がつかなかったらしいから、今日も自習だろうな…。」

「2年に上がってからまともに授業してないよね…。」

魁人がいうと愛子が苦笑いで返す。

「まあ、楽だからいい」木下 優子はいるっ?!「…なんだ?」

魁人が楽だからいいと言おうとすると、急にドアが開き、誰かが叫びながら入ってくる。

「木下 優子…私達を豚呼ばわりして…許せないわ!!」

「はあ? 話が見えないんだが?」

「君はCクラス代表の小山さんかい? 木下さんは朝からずっと僕らと一緒に居たが?」

Cクラスの代表「小山 友香」は優子に怒りを込めた視線を送り、
「そんなこと言っても騙されない！！私達Cクラスは、Aクラス
に宣戦布告するわ！！」

と、Aクラスに試召戦争をしかける。

「ああ、ついにきたね。本来こっちはなんのメリットもないけど。」

「……下位クラスからの宣戦布告は拒否できない。」

いつの間にか翔子も来ており、試召戦争のルールによって回避できないと話す。

「…ちっ、雄二め…。こういうことか…。」

「え、どういうこと?」

「なあに、誰の差し金か分かったってだけの話だ。」

魁人は面倒くさそうに話す。

「でも、今はFとBが戦っていますから、私達は開戦できませんよね?」

「FとBの決着がいたらもう一度来るわ…。首を洗って待ってなさい!」

美穂の疑問に友香はそう答えると、ドアを思い切り閉め、帰っていった。

「…しかし、優子にすごい敵意むき出しにしてたね…」

「……。」

愛子はそう言うと、優子は身に覚えがないため、戸惑っているよう。

「…気にするな。木下さんが何かやったわけじゃないんだろう?」

「う、うん……。」

「なら、気にすることはない。こっちは何もしていないんだからな。変な心配はするな……。」

「…ありがと。」

魁人は優子を励まし、頭にぼんぼん、と手をのせると、優子は恥ずかしそうにお礼を言った。

「…天然、鈍感だからこそできることだよねえ……。」

「…それにも程があると思うけどね……。」

愛子と久保はいつもどおり苦笑いする。

「……。」

そして、やはり美穂は複雑は顔をしている。

「さて、宣戦布告されたんだ、こっちも用意しなきゃな。」

「え？でも…。」

「……あっちがいつ終わるかわからない。」

魁人が言つと、愛子と翔子が疑問をかえす。

「遅くとも午前中には終わる。絶対にな。」

「…ちなみに、緑野くんはどっちが勝つと思ってるんだい？」

魁人は断言すると、久保が勝敗の予想を聞く。

「F。そもそも、屑が代表をやっているクラスに雄二達のクラスが負けるはずがない。」

「随分信頼してるのね…。」

魁人はBクラス代表「根本 恭二」が心底気に入らないらしく、屑呼ばわりする。

「それで、霧島さん。頼みがあるんだが…。」

「……何？」

魁人は代表である翔子に頼みがあるという。

「今回の戦争の指揮、俺に任せてくれないか？」

真面目な顔で翔子に指揮権をくれ、という。

「……別に、構わない。代表の私は動けないから、それが妥当だと思う。」

「ありがとう。じゃあ、早速、策の説明をするか……。」

魁人は策の説明をしたいようだが、まだ生徒は揃っていない。

「……朝のHRのときだな。そこが一番いいだろ。」

「……そうですね。皆集まってますし、宣戦布告のこともそのとき話しましょう。」

魁人の言葉に、美穂は賛同する。

「しっかりやってね？ 緑野くんがしっかりしないと、クラスが負けるんだから。」

「分かってる。やるべきときには、ちゃんとやるぞ。」

魁人は珍しくかなり真面目な表情でそう答える。

「頼んだよ。」

「頼りにしてるからね。」

「……じゃあ、私達は席に戻る。」

その顔を見て安心したのか、皆は安堵した顔で席に戻っていく。

「…さて、期待と、クラスの命運を背負ってるんだ。真面目にやんなきゃな。」

そう言つと、魁人は自分の席のパソコンに向かう…。

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？（後書き）

コメントを頂きました！

紫苑さん、毎回ありがとうございます！

朝の出来事だけで1話終わらせてしまった…。

次は魁人の策が披露されます！

面倒くさがりの真価やいかに？w

次回も読んでいただけると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

バカと居眠りとAクラス

2011年11月26日20時52分発行